GOD EATER ~神喰イ~

半熟者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R 　　く神喰イ

【Nコード】

N 8 3 9 4 M

【作者名】

半熟者

【あらすじ】

人類絶滅の危機。

それはすぐに訪れた。

初心者です

前書きとか改ページを加える時が多々ありますがよろしくお願
い
た
し
ま
す
ゲ
ー
ム
に
近
い
か
と
思
い
ま
す
が
よ
ろ
し
く
お
願
い
し
ま
す
(
笑
)

ブログ（前書き）

いきなりですが定期的に更新はできません

自分、ゲームが苦手です…

あしからず…

プロローグ

2050年代、文明は短期間で崩れ去った。

地球上のありとあらゆる対象を『捕食』しながら急激な変化を遂げ、通常兵器が全く通じない圧倒的力を有する生物によって。

『神』の名を冠する突如現れた人類の天敵 アラガミ

それが人類が何千年もかけて築き上げた文明の大部分を喰らい尽くした。

神は人類に救いを与えなかった。

しかし、最悪な状況下でも生き残った人類は生き延びることを望む。

アラガミが住まう世界で生き延びることを望んだ。

生き延びるために神に抗う。

生き延びるために神と戦う。

生き延びるために神を喰う。

それが神を喰う者『ゴッドイーター』の役目。
適性試験、ゴッドイーターになるためには必要らしい。何を基準に
適性かどうか調べているのか分からないが、どうやら自分は『適性』
だったらしい。

白髪で黒と白を主とした服装の青年になりかけといった感じの少年、
『レイン』は適当に考えていた。
見た目の年齢とは不釣り合いな眼光をしている。が、眼光は片目だ
け。
もう片方は黒い眼帯をしていた。

レインは無表情に辺りを見回す。
やはり命がけで戦っている『ゴッドイーター』は何から何まで水準
が高い。

『ゴッドイーター』は憧れの職場だ。
今日明日には死ぬかも知れない。しかし生活水準が高いのが理由か
もしれない。
もちろん、それだけが理由とも思っていないが…。

考えている内に適正試験の順が回ってきたようだ。

無駄に重苦しい鉄格子を何重にもした扉を押し開け、躊躇なく後戻

りできない道を歩み始めた。

適性試験（前書き）

こんな感じだったかな？（；・・）？

記憶力に自身がないので少しアレなのですが…。

適性試験

想像していたよりも広い空間だ。たかが試験程度でここまでの広さが必要なのだろうか？

壁や床、至るところに爪跡や銃弾を撃ち込んだ跡まである。まるで幾度となく、ここでアラガミと交戦したかのような痕跡だ。

疑問を持ちながら寂しく置かれてある非日常的な異物に目を向ける。赤い小型のギロチン、それも見える。

だがそれは、斬って落とすというよりも、押さえつける形状だった。

『長く待たせてすまない。』

スピーカーを通した若い男の声。声自体は部屋を反響してどこから聴こえているのか分からないが、姿は片方しかない目で捉えていた。

『さてようこそ…人類最後の砦『フェンリル』へ。』

嫌に高いところから三人がこちらを見下ろしている。その内の一人、声の主はあの『エイジス計画』発案者の『シクザール支部長』だ。『今から、対アラガミ討伐部隊『ゴッドイーター』としての適性試験を始める。』

現状、良い印象はない。広々とした部屋で高みの見物をされていればカゴに入れられた虫、モルモット実験台にされている気分になり、体が強張る。

『少しリラックスしたまえ、その方が良い結果が出やすい。』

まるで見透かしたようなタイミングだった。読心術というわけではなく、単なる慣れなのだろう。

『心の準備ができたら中央のケースの前に立ってくれ』

適当な所で考えるのをやめ、言われるがままに中央の異物に近づいた。

ケースと呼ばれた異物は存外、たいしたものではないように見えた。そのケースの上に置かれた武器、通常兵器が効かないアラガミを喰う武器『神機』が置かれていた。

……これを握ればいいのだろうか？

「……………」

……何も起きない。

そう思った直後だった。

瞬きするよりも早く腕が挟み込まれた。

「ちょっと待てエ！！これ熱い！！

普通に痛いし痛いし痛いし！！

スンゲー熱いんだけどオ！？

変な音がしてるし！！

なんかグチユグチユいつてるし！！

まさか…喰われているのか！？」

腕の痛みは熱からのが強い。

そつえば、聞いたことがある。

適性試験に失敗した者の最期を。

…アラガミとなる。

試験は、ゴッドイーターは自身にアラガミの一部を移植すると。

それはつまり、自身がアラガミとなる危険性を秘めている。一瞬間
違わなくても命を落とす危険性だってある。

それが当人だけとは限らない。

それでも『神機』を扱うためには移植しなければならないらしい。
嘘か真か知る由もないが『神機』にもアラガミの一部が使われてい
るらしい。

もし本当ならば『神機』に喰われないために移植するのだ。

下らない話が脳裏に浮かぶ。

(……で、アラ……ガミに……。)

嫌だ。

死ぬのも殺されるのも。

嫌だ。

いつか訪れる死に怯えながら生きるのも。

嫌だ。

嫌だ嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ。

… こんなところで死ねない

ブシューと音を立て、熱風が顔を撫でる。肉を焦がしたかのような臭いが鼻につく。黒い煙が立ち込め、表情がほんの僅かに歪む。

まず始めに浮かんだのは安堵。手足を見る限りアラガミになっていない。

その次には高揚感と、確信。

ついに手に入れたんだ。神を喰う力を。

『おめでとう、君がこの支部初の『新型』のゴッドイーターだ。』

適性試験はこれで終了だ。』

どうやら無事に試験も終了したようだ。どうなるかと思ったが無事に済んで何よりだ。

教練担当者（前書き）

主人公のキャラがわかりにくいかと思いましたがご了承下さい。

あと、気になる所があれば指摘して下さい。

お願いします（ ー ー ）

教練担当者

一段落ついた、というべきなのだろうか。
ただっ広い部屋から出て、ようやく実験台という意識から解放された。

ここは待合室だろう。

インテリアっぽいテーブルを囲うようにやや固めのソファがいくつ
か置かれ、軽快な金属音を奏でる鋼鉄の板が敷き詰められている。

ため息をついて、やや固めのソファに腰を下ろした。

(なんつーか、今さらつーか)

歡喜に似た高揚のせいで気がつかなかったが腕輪がつけられている。
この腕輪が神機のアラガミに喰われないようにするための命綱らしい。

考えてみれば、そんな便利アイテムがなければ痛みを感じる前に喰
われていただろう。

(そこは別にいーんだけどさあ…)

不満はそこではない。適性試験後、即座に『神機』が没収されたことだ。いくら新型で珍しいといえど、あまり理不尽過ぎる。

「ねえ…ガム食べる？」

「うわぁ！」

突然、声をかけられソファから落ちかける。なんとか持ちこたえ、視線を向ける。

ニット帽に赤毛、活発な色合いの着こなした。肌の色はやや白く、口調は見た目通り明るい。

「って、コウタか。」

「とりあえず頂こうかな。」

藤木コウタ。外部居住区という一般市民が住む居住区の住民で奇遇にも隣人。つまり知り合い。服に興味はないからよく分らないが、コウタが気に入っている外部居住区で人気ブランドの衣服を着ている。

「あ、切れてた。今のが最後だったみたい。」

ガムを受け取ろうと差し出した左手を握り拳にする。無償に人が殴りたくなってきた。

「ごめんごめん。」

「どれだけガムを噛む事に集中していたんだ。」

「ごめんって言ってるだろ。」

ガムくらいでそんなに怒るなよ。

昔から感情の波が激しいんだから。」

普通は最後の1つを口にした時点で気がつくと思う。ま、コウタの家族には色々世話になってるし、我慢するかな。

「お前も適合者なの?」

「だからここにいるんだよ。それがどうかしたのか?」

コウタは自慢気に鼻を鳴らす。これはなかなか期待できそうだな。

「俺と同じ年だけど…ま、一瞬とはいえ俺のほうが先輩ということ
で!」

「別にいいけど、お前が知りたくなかったであろう情報教えてやる
うか？」

お前の妹の彼氏とか、彼氏とどれくらい親密なのかとか。」

「いも…！？ちょっと待て！」

「なるほど、その辺りが気になる訳か。」

藤木コウタ、母親と妹の三大家族。

念入りに調べてやろう。呆然としているコウタは放って置いて頭の中では着々と計画を立てる。

「ん？」

いつの間になっていたのか大人のクールな雰囲気と妖艶な色気を漂わせ、
白がメインで胸元が露出し、腕輪をしたスタイル抜群の美人な女性
が立っていた。

「立て。」

反射的に体が動いた。

腕輪、彼女も『ゴツドイーター』のようだ。雰囲気からただ者ではない。

「え？」

突然だったせいでコウタは固まっていた。

「立てと言っている！立たんか！」

いきなり怒鳴られてコウタが慌てて立ち上がる。緊張のせいか反り返ってしまっていてかなり気になる。

「厳しい女性で『ゴツドイーター』。

……もしかして、ツバキさんですか？」

「そつだ、私は『元ゴツドイーター』の雨宮ツバキ。お前達の教練担当者だ。」

「えっ、何？有名人？」

交互に顔を見つめるコウタに、

「兩宮ツバキさんは過去に『ゴッドイーター』を務めていた方だ。

今は引退しているがこうして僕ら新人の基礎体力の強化、基本戦術の習得といった、『アラガミ』との戦闘で必要な事をご指導をしてくださる。

つまり、死にたくなかったら言うこと聞けって事。

ちなみに下着は着けてな……。」

説明している途中でとてつもない殺気を感じ押し黙った。

流石は『元ゴッドイーター』、並の女性とは殺気のレベルが違う。

「……さつそくメディカルチェックを」上官に嫌われるとロクなことにならない。

血の気がドンドン引いていくのを感じる。

「まずはお前だ…変態。」

間違いない、嫌われてる。酷く嫌われてる。

しかし、いくらなんでも初対面からいきなり変態扱いは酷すぎる。

「ペイラー」サカキ博士の部屋に一五　　までに集まるように。」

一五　　…ということは午後三時。今の時刻はちょうど正午。ならば、イケる！

「それまでに施設内を見回っておけ。」

時間帯からしてもメデイカルチェックまでに余裕がずいぶんある。店でもあれば何かを買ってさっきの暴露を詫びよう。

「今日からお前らが世話になる、『フェンリル』極東支部、通称『アナグラ』だ。メンバーに挨拶の一つもしておくように。」

ツバキさんに一言でも謝りたい。

見た目や口調からは何もしないだろうが、それでは気まずい。

一一二　　、十二時十分。

ようやく解散され、自由を得た。

コウタとは別行動で『アナグラ』内を探索する。

最新の技術が使われているだけあり、見たことが無いものしかない。眺めていても仕方がないので、任務に出る際に使われている『出撃ゲート』の前に立つ。

図上にモニターがあり、映っているのは『アナグラ』を中心とした近隣の世界。かつて、『日本』と呼ばれていた地域。

痩せ細った小さな島国。

元の形など想像もつかない。

『アラガミ』という虫に食われた葉。

『アラガミ』はなんでも食べる。

草や土、犬や猫、そして人間。

無差別に食欲に全てを喰らい続ける人類の天敵。『アラガミ』によって、地球上に存在するあらゆる種は消されていく。

レインは強く拳を握り締め、その拳を目を向けた。

カミサマだからなんでも許されると？

思い上がるなよ、化け物め。

お前らがどれほどの力を持っていようが、全生物の頂点に立つことが関係なく、殺す。

例え、決して死なない神のような奴なら自分で死にたくなるまでの恐怖を味あわせてやる。

「っと、それよりツバキさんだ。早く謝らないと。」

忘れつつあった目的を思い出し、ツバキさんを探す。何かを渡して詫びようと考えていたが、やめた。なんとなく喜びそうにない。

出撃ゲートの近くにある階段を降りると、すぐにツバキさんの姿が見えた。

誰かと何かを話していて近づき難い。時間もあるため、偶然にも近くにあった露店商らしき人に話しかける。

「変な恰好の怪しいオッサン。」

考えている事が口に出てしまった。赤と黒の縦縞の帽子とズボンに丸いサングラス。

そして、首に掛けているみぞおちくらいまである長いアクセサリ。サングラスが割りたくなる怪しさだ。

オッサンは驚いた顔になったが瞬時に取り繕い、

「新入りかい？『アラガミ』と渡りあうのに必要な物はここで補充していけ。」

「他は？」

「…は？」

「他にはないのか？
日用品とかアクセサリとかは？」

僕はその表情を無駄にする。

怪しさ満点のオッサンの呆然とした表情から、そういったモノは無いことを悟り、真正面からツバキさんに戦わなければならない事を悟った。どうしよう、ツバキさんが大きく見える。
いや、人が急に大きくなるはずがない。

深呼吸をして気を落ち着かせると意を決して声をかける。

「あああの、つつツバキさん。」

初対面で変態呼ばわりされるほどの大失態をした直後に冷静でいられるはずがない。

「…なんだ。」

怖ッ！表情を変えないのが怖い！
今すぐ逃げ出したい気持ちを抑えて、なるべく早く済ませよう。こんな機会に二度と遭いたくない。

「さ、さっきはすみませんでした！」

世間体を気にせず45度に頭を下げた。

初対面の女性に頭を下げるのは初めての経験だ。さっきの怪しいオッサンは面白そうにこちらを見ている。僕は見せ物じゃない。しばらくするとため息が聞こえた。

「顔を上げる。」

声に怒気は感じない。

おずおずと顔を上げると呆れた様子で、

「見た目と中身の差がありすぎる。

しっかりせんか！」

「あっそれ、よく言われます。じゃなかったホントすみません！」

また口が勝手に…。

それにしても元とはいえ『ゴッドイーター』、やはり怖い。

ツバキさんは心底呆れた様子でため息をついた。

「…メデイカルチェックは済ませたのか？」

「えっ？まだ充分過ぎるほど時間がありますけど…。」

「さっさと行け！」

「はいい！」

逃げ出すようにツバキさんから離れ、区画移動用エレベーターに駆け込んだ。

心臓が止まるかと思った。見た目から厳しい人とは思っていたが静かに怖い。

そっういえば誰と話していたのだろうか。

教練担当者（後書き）

多分、余計に主人公のキャラが分かりにくくなったかと思います…

あしからず…

メデイカルチェック

いくらなんでも二時間以上前に着いてしまえば準備ができていないに決まっている。

そんなわけで部屋で適当に時間を潰し、メデイカルチェックへと向かう。

「えっと…メデイカルチェックってどこでするんだ？」

思い返してみるがツバキさんは一言も言っていないな…。

聴けそうな知り合いはコウタしかいない、だが残念ながらコウタは部屋にはいない。

困っていると前からサングラスを掛けた赤いベストを着た赤髪の男が歩いてきた。男は黒がメインで暗い黄土色のブーツを履いている。

「お、君が例の新人君かい？」

『新型』は僕一人なので少し特別視されているのだろう。馴れ馴れしいのに鬱陶しくない不思議な男だ。

「僕はエリック。

エリック・デア。フォーゲルヴァイデ。」

覚えきれない。

「僕はレイン。よろしく。」

正直、孤立していそうな人だ。

「君もせいぜい僕を見習って、人類のために華麗に戦ってくれたまえよ。」

彼はどうやら人類のために戦っているようだ。第一印象、ナルシストと遊び人。

人類の危機、誰にとっても『アラガミ』はそういった存在なのだ。

『人類の天敵』

『絶対の捕食者』

『世界を破壊するもの』

それが『アラガミ』なのだ。

「ところで困っているように見えたけど、どうかしたのかい？」

赤髪の男、エリックが聴いてくる。

会って間もないがなんとなく嫌な奴に思えてしまう。

馬鹿にされそうで言いたくないが他に当てがあるわけでもない。

このままではまたツバキさんに怒られてしまう。

事情を話すと、エリックは「なんだ、それなら『ラボラトリ』だよ。

」とサカキ博士の研究室まで案内してくれた。

意外と良い奴なのかもしれない。『アナグラ』は訳の分からないモノばかりで混乱するが、サカキ博士の研究室はもつと訳が分からない。

意外と優しいエリックは研究室には用がない、と自室に戻っていった。

エリック…ついてきてくれるなら、この別世界までついてきて欲しかった。

正面のディスプレイに囲まれた白髪天パの方がツバキさんとは違う意味で怖い。

「ふむ…予想よりも86700秒も遅い。

ようこそ、規格外の『新型』君。」

1分＝60秒
1時間＝1分×60
＝3600秒
1日＝1時間×24

3600
× 24

14400

7200

86400

「予想以上の数値に驚かされるよ。」

「あ、はは……。」

エリックがでたらめに案内したわけではない。むしろエリックは親切に研究室に案内した。

ただ、時間に余裕があるなー、と広くて綺麗な自室の床を転がり回ったり、冷たくて気持ちが良い冷気を味わうために冷蔵庫を何度も開け閉めしたり、フカフカのベッドで夢の中を冒険していたレインが1人で叩き出した『フェンリル』史上初の大記録だった。

「私はペイラー」サカキ。
アラガミ技術開発の統括責任者だ。

以後、君とはよく顔を合わせる事になると思っけどよろしく頼むよ。
」

サカキ博士は本当に見えているのか疑わしいほど目が細い。キツネ目、という奴だろう。
博士はキーボードを叩きながら、こちらに何か企んでいるような不敵な笑みを浮かべた。

「そのベッドで横になって。」

「な、何をする気だ！」

目つきと何を企んでいるか分からない笑みから豊かな想像力は18禁的要素を引きずりだし、背筋に冷たいモノを感じさせられた。

「…？何を想像しているか知らないが、つかの間の休息というやつだね。」

そつだ、僕は何を言っているんだろ。
そんなわけないじゃないか。大人しく横になろう。

…あれ？急に睡魔が…。

目が覚めた時には自室のフカフカベッドの上だった。メイカルチエックのため研究室に行った記憶はあるのだが、そこから出た記憶がない。

「なんだっただ…？」

体を起こすと激しい頭痛と目眩がした。部屋から出ることすら難しそうだ。

フラフラと立ち上がると床に倒れこんだ。無論、体力が尽きたわけではない。

「床、冷たい。」

そのまま、起き上がりながら夢を見た。顔さえ知らない両親と過ごす幸せな日々。かつて親友だった彼とやんちゃしていた日々。

いつも夢見る終わっている日常。
決して元には戻らない過去。

今となってはどつでもいい。

僕はとうの昔に壊れてしまっている。
コウタに会うずっと前から。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8394m/>

GOD EATER ~ 神喰イ ~

2011年10月7日13時52分発行